

あとがき

現代人物肖像画展も今回で第5回目である。今回はO・ルドンの「マレーヌ王女」からH・ミッデンドルフ(ニューペインティング)の人物まで30点余を展示することとした。例によって、この一年間に機会をみて私の好みで選んだ作品である。版画が多いのも例年どおりである。作家名を生年順にならべると次のとおりである。O・ルドン, E・ノルデ, H・マチス, M・デュシャン, M・レイ, 長谷川利行, J・ミロ, H・ムーア, A・ジャコメッティ, J・デュビュッフェ, 海老原喜之助, 鶴岡政男, 今西中通, ヴォルス, J・ボイス, G・シーガル, F・フンデルトワッサー, J・ダイン, P・ベエムメルス, H・ミッデンドルフ

当画廊は昨年10月末、思い掛けなく京橋からこの銀座4丁目に移転してまだ3ヵ月余りである。これを機会に一言、新画廊のこと、それに関連し若干のことを述べておきたいのである。新しい画廊は数寄屋橋の交叉点のそばで地の利も良く、来客が多いのはありがたいことである。面積は従来の2倍(31坪), 天井の高さも3.8mと2倍弱で、従って容積的には4倍弱となった。ゆったりとした白い壁面・空間には現代美術はよく似合う。300号の大作もゆったりとした距離を置いてみられるのはうれしい。作品がところを得て、生き生きとした表情をみせてくれるのはたのしいことである。天井が高すぎる所以小品をならべるとどうなるかと心配したが、エルンスト展をやってみて安心した。やはり量的な大きさではなく作品は内容が問題だ、ということが分った。小品でもナカミが濃いと空間はシマルなのである。

今後の画廊の方針は従来通りで変わらない。戦後の優れた内外作家と戦後現代美術の出発点となった20世紀前半の諸作家の展覧会を主軸に、そのヴァリエーションを含めて事情の許す限り積極的に展開して行きたいと思っている。大変むつかしいことであるが、そうしたいと希っている。従来よりもはるかに広くなった壁面を安易なものでうめるのは簡単であるが、自分の納得できるしかるべき作品でみたすということは困難なことである。しかもそれが営業的にも成り立つようになるとさらに困難である。しかし、まあ、これは現代美術をやるもの宿命であろう。丁度次元の異なる2面が接する稜線をバランスよく重い荷物を負って歩く登山者のようなものである。そのうち状況も変ってくるのであろう(もっとも昨今キナクさいニオイがするのは気になるが)。時間がかかるのである。宿命といえば、美術商の宿命というのは時間との長い戦いということではなかろうか。

昨年4月に刊行した「私の画廊——現代美術とともに——」は未知の方も含めいろいろと読後感をお寄せいただき、ありがたく思っている。“画廊経営実感論”がやはり一番興味があつたようである。「ピカソ以後」、「知命記」がそれぞれ私の転換期に出版されたように、この「私の画廊——現代美術とともに——」も新しい画廊に移転することを半年前に予感して出版されたといえるかもしれない。新しい画廊を得たことは私にとっては一つの転換期である。この機会に新しい眼で謙虚にものをみるところから改めて出発したいと思う。

なお、前回の現代人物肖像画展(第4回)カタログのあとがきにおいて、フジタの小文について書く予定が不可能になったと記入したが、その後、「私の画廊——現代美術とともに——」のなかで“ノワイユ夫人とフジタのはなし”と題して書いたので一言申し添えて置きたい。

最後に、これからも面白い企画展をやっていきたいと思っているので、ご支援のほどお願いする次第である。

1983年2月14日

佐谷画廊
佐谷和彦